

戦後美術を読み直す

吉仲太造

TAIZO YOSHINAKA

Rethinking of Japanese Art since 1945

1999年12月7日^{TUE}火 — 2000年1月30日^{SUN}日

■開館時間：午前9時—午後5時（入館は午後4時30分まで）

■休館日：12月12日(日)、13日(月)、20日(月)、24日(金)、27日(月)/12月29日(水)~1月3日(月)/
1月9日(日)、11日(火)、17日(月)、24日(月)

渋谷区立松濤美術館

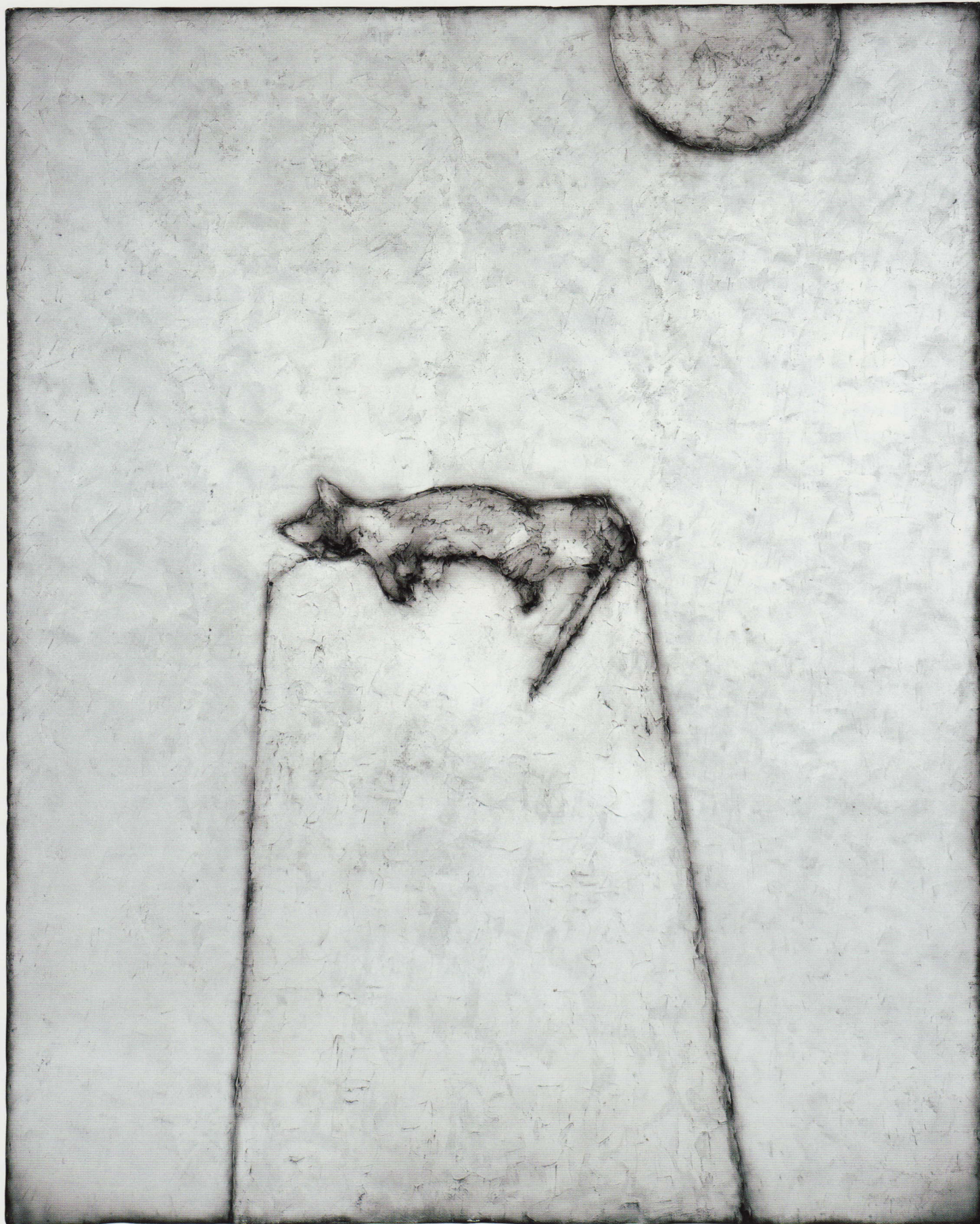
主催＝渋谷区立松濤美術館

協賛＝JHI/EIDO

The Shoto Museum of Art

■入館料：一般300(240)円/小中学生100(80)円

* ()内は10人以上の団体料金/65才以上の方および障害者の方は無料/第二、第四土曜日は小中学生無料



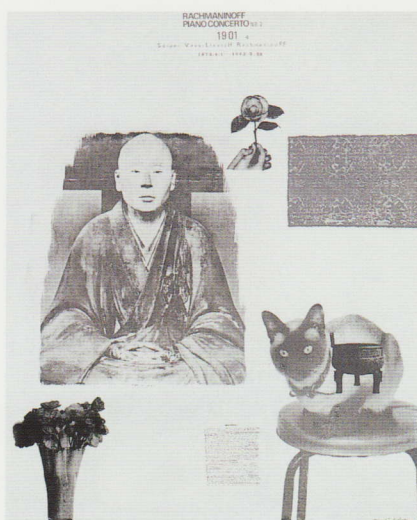


《地球人》1956年 東京都現代美術館蔵

吉仲太造(1928-85年)はドラスティックに作風を変え続けながら、戦後美術を生き通したひとりの画家です。彼は人間像を描くことなく、徹底してモノを描くことで、戦後の日本人の精神史を描ききった特異な作家でした。

吉仲は京都に生まれ、働きながら草創期の行動美術研究所で美術を学んだ後、1951年に上京しました。彼は美術作品が商品になりえない時代に画家として出発し、芸術と社会の変革を考える評論家や画家仲間、採算を度外視した貸し画廊等に支えられ、家族の献身を受けながら、以後没するまで、東京に住み反骨の姿勢を貫いています。

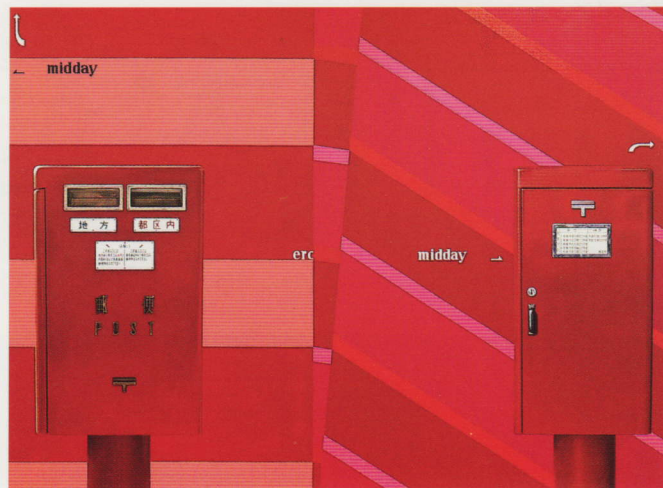
日本の高度成長期をアイロニカルな批評精神をもってみつめた吉仲は、新聞の株式欄などをコラージュした連作「遺産」(1966年頃)で、経済の肥大と表裏をなすひとびとの精神の空洞を喝破し、象徴的な墓標を提示しました。芸術が社会的な運動だとかんじられた時代がいつしか去り、70年代以降、うつ病に苦しんだ彼は、コミュニケーションの不在をテーマにした連作「病と偽薬」(1975年頃)を経て、次第にモノの存在の深淵を考察するようになります。晩年、死に至る病とともに吉仲が達したのは、



《病と偽薬 4》1975年

「非色の逆説」と題された、白い、ぎりぎりまでにそぎ落とされた絵の在り方でした。これらは、第二の敗戦とも呼ばれる今世紀末に立つわたしたちにとって、深い示唆と滋味のようなやさしさを届けてくれる、黙示録にも似たメッセージです。

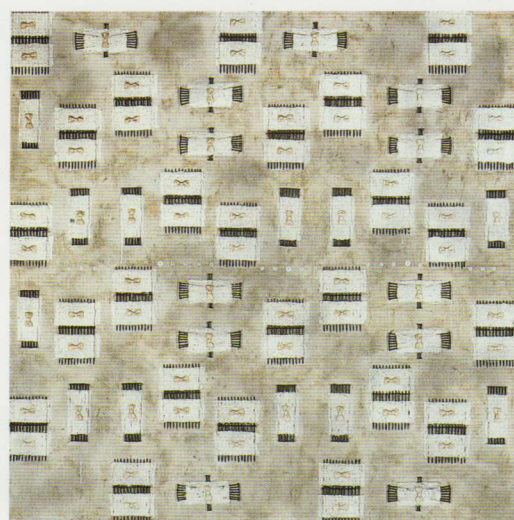
一見全く異なって見える吉仲の各時期の仕事のうちには、硬質で結晶度の高い造形、深い洞察と



《真昼のエロス》1967年 高松市美術館蔵

TAIZO YOSHINAKA

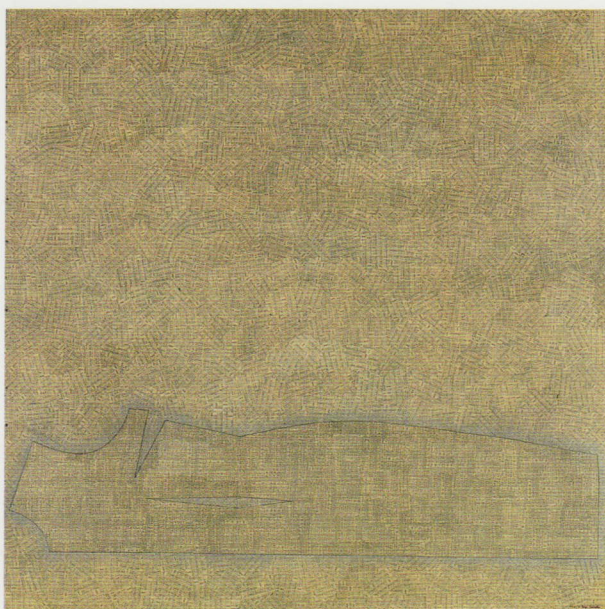
Rethinking of Japanese Art since 1945



《釘とリボン》1963年

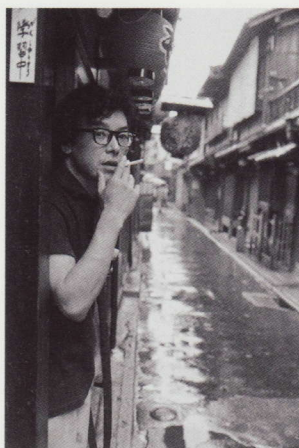
批判力、そして全体に漂う不思議なユーモアが一貫した個性になっています。そして同時に、これらは変貌を続けた日本の戦後社会の、精神の軌跡でもあるといえるのです。

吉仲太造の仕事を今回振り返ることにより、戦後の美術と人間の動向を、従来とはまた異なった視点から見直すことが可能になるのではないのでしょうか。



《遺産》1966年 国立国際美術館蔵

- 講演会
「吉仲太造と戦後日本の精神史」
講師：中原佑介氏(美術評論家)
1月8日(土) 午後2時より



《作家ポートレート》1957年頃 大辻清司：撮影

- 美術相談
12月26日(日) 午後2時より
講師＝広畑正剛(油彩画)/林美紀子(版画)
1月29日(土) 午後2時より
講師＝遠藤原三(油彩画)/大和屋巖(水彩画)
- 美術映画会
12月25日(土) 午後2時より
「磯崎 新 1960-85」M.ブラックウッド(監督)
1月22日(土)
午後2時より
「黒川紀章」
M.ブラックウッド
(監督)

渋谷区立 松濤美術館

● 渋谷区松濤2-14-14
Tel. (03) 3465-9421

● JR[渋谷]駅下車徒歩
15分 一 京王井の頭線
[神泉]駅下車徒歩5分

